



多良間島の織物

たたらま花保存会 ● 多良間発

多良間村は先島諸島の宮古島と石垣島のほぼ中間にあり、面積は19.75km²の楕円形をした多良間島と、約8km離れた面積2.153km²のさつまいもの形をした水納島の2島からなります。人口は一千三百人、牛四千頭。人よりも牛やヤギのほうが多い、農業と畜産が主な産業であるのかな島です。

琉球王府が東南アジア、中国、日本との中継貿易で栄えた中世には、沖縄本島と宮古、八重山地域を結ぶ航海上の要所でした。また、琉球王朝時代から旧暦の八月に行われる「八月踊り」は、今ではこの島にだけに残る踊りで古典踊りや組踊りは、首里を中心とする沖縄島のそれとは格段の相違があり、野趣溢れた伝統芸能です。

「朝鮮王朝実録琉球資料集成」に、一四九七年、朝鮮の濟州島に宮古多良間（也求羅麻）島人が漂着、島には多良間花（紅花）が多く産し、これを琉球王朝に入貢し、帰還する途中に難破し、濟州等に漂着したという記録が残っています。

このことから、十五世紀には多良間島では「たたらま花」（紅花）の栽培が盛んにおこなわれていたと思われる

「たたらま花」は、いまでは多良間村の「村花」にも指定され、たたらま花保存会が発足。花を増やし染料とし、多良間産の紅花で染めた糸を用いた織物の創作がおこなわれています。

多良間産の紅花は染料にすると、他の産地よりも鮮やかできれいな色が出るため人気があります。



十五世紀後半には多良間島では、すでに地機と呼ばれる織り機があり、衣類には芋麻や糸芭蕉、ユウナ、桑などの繊維を利用し、地元で採れる八重山藍などの植物から抽出した液で糸を染め、芋布(芋麻の布)を織っていました。その琉装の着物はエリやヒダがなく、袖が広く丈の短い衣服を着用していました。

それは、多良間には約五百種類の植物が自生していますが、その半分が薬草や染料しとして活用できたからです。

紅花べにばなの咲く島

多良間村

紅花は、飛鳥時代(六世紀後半〜八世紀初頭)に原産地のエジプトなどからシルクロードを経て渡来したとされます。中国では簡陽、中江が主な産地ですが、沖縄では琉球王朝時代から「たらま花」と呼ばれ、王府や中国への貢納品として扱われてきました。

多良間へはどのように伝わったかの記録はありませんが、中世の中国や東南アジアとの交易を通じてもたらされたと考えられています。



たらま花による織物の製作に取り組んでいる宮古の本村工房の皆さん。向かって右から、本村千智さん、愛犬キナコ、川満和美さん、砂川正巳さん。



多良間島の織物が生まれます
多良間産の紅花を使った織物
に取り組んでいます。
多良間島で、「たらま花保存会」
(佐久本洋子会長)が中心とな
り、多良間産の紅花と八重山
藍、フクギなど地元で採取した
植物染料による織物の創作が
進み二〇一八年の発表を目指
しています。

蘇える「紅の織物」

よみがえる

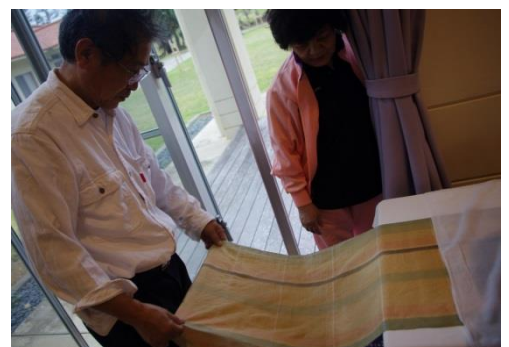
べに



染料として用いる八重山藍も本村さんの
工房の庭の畑で育てられている。

村の体験施設のある「夢パティオ」で
保存会による試作織物の仕上げ作業。

右奥が宮古の本村工房の本
村三子さん、手前が娘の本
村千智さん。
織上がった試作の布をマキ
釜で炊いて湯洗いし、つぎ
の仕上げ工程に入ります。



※ レポート
織の財団 理事長
山田標件
平成 26 年 11 月